

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

路傍詩

5 輯

路傍詩を續刊致しました

しばらく休刊してましたが
今月よりすうと毎月一回先
發行致します

全巻は毎月十五・迄
に下さい

六月

曙留
紙一

路傍詩

5 輯

路傍詩を續刊致しました

しばらく休刊してましたが

今月よりすうと毎月一回発

行致します

全巻は毎月十五・迄

に下す

六月

贈男
紙一

● 生の涯

五十嵐節郎

生を能くする執着の
破れし骸ここに置き

ゆらめく煙は
呪ひの黒き血

洗滌の罪の結晶

ありす夢の残り
ありす夢の残り

● 色紙の踊り子

長瀬一美

バサ

何んだらう

まあだ朝であうと言ふに

赤・青・黄色の小さい手 手もつないで

紙の切れ

紙の切れ
と音つて何んでもないが
水溜りのメカネからはなれぬいのか
不思議である

● 忘我

松本純一

它を眺める 恐ろしい花束だ

● 眠る女の語

それは水である酒に

口を吸った時に
赤い唇船玉を呑んで了った

またたく眼に
胸花はスツカリ赤くあがり

綺麗な斑点に心かゝる

尾新裂ける音響は
あれは ふうこびだ

●

高橋勝男

いちの煙にはだしの母子
健やかなるかひなきを伴して

蜘蛛の背が光った

肉身が 軽くうつ

●

平つたい気晴しです

食慾も喰った黄土が見えます

俺が恋愛の

上无氣を就上げろで
小牛のやうな雲が

とけかけますでせう

● 教へ子

高橋水声

いっまでも動かない二本のクイが

みえなくなつたり
急に眼蓋が熱くなつた

—— 汽車の窓から ——

● 頭から尻尾を穿した話 中野重雄

五階層の館はセツの窓を構つてある

私は眠と鼻と口と——を構つてある

空は一つ、太陽と千羽の星を構つてある

それは黄河の図上に竹杭と銅牌とを構つてある

1 はうはうに打ち振れた電線。蒼蒼は
空の動揺を見た

2 すばらしい色彩を構つたバラの花は
女の唇の汚穢を見た

3 虚無思想は飾りれた豚小屋に海へ赤
く熱したうを見えた

4 風船の燐々ある山上の小児のつぶれ
た顔を見た

私は西洋館に住んで元々を愛し いたす
うを那の形貌を見てみた

●曇花

石川 龍虎

杜

読書

まつすぐに歩いてゆき
私は電柱に眺らぬまゝで了つた

●落雪

砂の丘に霞るゝになつて
銀色の海を眺めてゐると
紙幣のやうに揺れてくる

悪んは私の側で
倒立のラミット型ナイマイトの上に
坐つてゐるが
頭はみみずはれになつてゐる

●日記

●路傍詩五首

・新鮮さや俺達か誇ることはけいして
高慢ではないのです

・餅壇も混濁も俺達は みつめすぎる
往つてききました

勝男

・こんな夢をみた
あたまりやうと一生懸命月を浴び
てゐたり見知りぬ蛙となり虫を吸つ
てしまつてゐた

・童謡は陽を生して風を呼ぶ招く不
ラの葉である それで路傍詩は復活
した

・埋れた 新うしろミイラを発掘して
いぶきと云ういふきとをわすれて
を越へさせやう

純一

大正十五年六月二十五日發行 ●五首

福島県石川郡平野町大工多
電行社 路傍詩

一・純一
高・勝男